様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０４８１

研究課題名（和文）日本語の連文における「接続語」の理論的基盤の構築

研究課題名（英文）Building a theoretical foundation in Renbun of Japanese of "Conjunction"

研究代表者
岡崎　友子（okazaki, tomoko）

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：１０３７９２１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では、日本語の現代・古代語における文と文をつなぐ接続語（接続詞・フィラー・指示詞）について、様々な言語の分野における研究者が連携し、記述・議論をおこなうことにより、その機能の理論化をおこなった。
　本課題の主たる研究成果は、現代・古代日本語において、指示詞・接続詞・感動詞（指示詞を構成要素とするもの）は次のような関係性にあることを明らかとしたところにある。古代語から見られる「カクテ・サテ」「サレバ」等の調査から、そもそもこれらの語は、指示詞＋助詞等から接続詞へと変化し、さらに感動詞へと歴史的に変化すると考えられる。多くの指示詞を含む接続語は同様の歴史的変化を起こすことが予測される。

研究成果の概要（英文）：This study is intended for conjunctions in Japanese, by researchers in the various field ;gathered, and a discussion was subjected to theory of functional conjunctions.The main research results of this study lies in it has been clear that in the relationship, such as the following: interjection and conjunctions and demonstrative.These results are due to the investigation of ancient language "Kakute,Sate" and "Sareba", etc.
1)The terms of these, first, what was a demonstrative + particle is changed to a conjunction.2)In addition, the conjunction of these changes to the interjection gradually historically.Causing historical Similar changes are expected coupled expression containing a demonstrative many.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：国語学　接続詞　指示詞　歴史的変遷　フィラー　理論化

１．研究開始当初の背景

　これまで、指示詞・接続詞・感動詞・フィラー等は、各分野において個別のアプローチにより（さらに、個別の語を対象に）研究がなされてきた。
　特に、現代語「ソレデ・ソコデ」等、古代語「カクテ・サテ」等の接続詞、現代語「アノー・ソノー」等のフィラー、現代語「ソウダ！」等の感動詞については、それらの語（句・連語）の構成要素が指示詞であるにも関わらず、指示詞の研究成果を取り入れた研究は、管見の限り見出せないのが現状である。
　しかし、そのような指示詞を構成要素とする接続詞（指示詞系接続語）、感動詞、フィラーの本質的な性質を明らかにするためには、そもそもの指示詞としての機能を視野に入れながら分析をおこなう必要があると考えられる。
　そこで、本課題はさまざまな接続語（指示詞・接続詞・感動詞・フィラー）の研究者が集まり、接続語全体を調査・分析し、相互に議論することにより、研究対象・各分野のアプローチを超えた理論化をおこなった。

２．研究の目的

（１）先行研究のまとめと用法の記述

　接続語の研究をおこなうため、次のＡ・Ｂ・Ｃについて先行研究をまとめた後、現代・古代語の用例の採取をおこなった。

Ａ：接続詞（現代語「ソシテ、ソレデ、ソコデ」等、古代語「カクテ、サテ」「カカレバ、サレバ」等）の先行研究の収集と用例採取

Ｂ：感動詞・フィラー（現代語「ソウダ！」「アノー、ソノー」等）の先行研究の収集と用例採取

Ｃ：指示詞（現代・古代語）の先行研究の収集と用例採取

　なお、上記のＡ・Ｂ・Ｃの用例を採取した後に、それぞれの用法について記述をおこなった。

（２）接続語の理論化

　（１）に示したＡ・Ｂ・Ｃはすべて、文と文（段落と段落）をつなぐ接続語であり、体系的に研究をおこなうべきであると考えられるが、これらを総合的に分析し、理論化したものは、これまでの研究では見出せない。
　そこで、本課題では上記のＡ・Ｂ・Ｃの先行研究と用法の記述から、それぞれの機能を分析し、さらに議論をおこない、接続語の用法と歴史的変化の理論化をおこなった。

３．研究の方法

（１）2010 年度

　本課題の初年度であったため、研究の基礎作りの年度として、まず３年間の研究方針を決定するための打ち合わせ及び研究分担の確認をおこなった（会場については、第１回就実大学（2010 年 8 月 30 日）、第２回大阪大学（2011 年 1 月 22 日））。
　そこで、以下の研究分担となった。

＊岡崎友子（研究代表者）・竹内史郎（研究分担者）：歴史的な接続詞と指示詞
＊堤良一（研究分担者）：現代語のフィラー
＊長谷川哲子（研究分担者）：現代語の接続詞
＊岩田一成（研究分担者）：現代語の指示詞・感動詞
＊松丸真大（研究分担者）：現代語の方言における接続詞等

　以上に従い、先行研究の収集と用例の採取・分析を開始した。

（２）2011 年度

　2010 年度に引き続き、先行研究の収集と用例の採取・分析をおこなった。
　さらに、収集した用例から記述、考察をおこない、打ち合わせ及び研究発表会を開催することにより、相互に議論をおこなった（研究発表会については、外部に公開した）。

○第一回打ち合わせ・研究発表会
場所：就実大学
日時：2011 年 9 月 7 日 13：00～17：00
（研究発表）
発表者：松丸真大（研究分担者）、題目「指示詞コノ・ソノ・アノの指示領域―高橋調査法による滋賀大学での調査から―」
発表者：堤良一（研究分担者）、題目「フィラー「アノー・（ソノー）・コー」と身体動作」

○第二回打ち合わせ・研究発表会
場所：就実大学
日時：2012 年 3 月 1 日 13：00～17：00
（研究発表）
発表者：竹内史郎（研究分担者）、題目「古代日本語の主節の無助詞名詞句―活格性との関わりから―」
発表者：岩田一成（研究分担者）、題目「裸名詞句による同一指示照応の可能性」

（３）2013 年度（2012 年度は中断）

　2011 年度に引き続き、先行研究の収集と用例の採取・分析をおこなった。
　最終年度として、下記の日程でメンバーが集まり、これまでの成果の報告をおこなった

（及び研究発表会）。

場所：東洋大学
日時：2013 年 7 月 27 日 13：30～17：00
（研究発表）
発表者：竹内史郎（研究分担者）・荻原咲、題目「「さらば」の日本語史」
発表者：岡崎友子（研究代表者）、題目「中古における接続語の使用傾向について」

４．研究成果

本課題の第一の研究成果として、指示詞系接続語の歴史的変化のシステムを、実際の用例をもとに明らかにしたことにある。（指示詞系接続語とは「指示詞＋助詞等」（例：現代語、指示詞「ソレ・ソコ」＋助詞「デ」等、古代語、指示詞「カク・サ」＋助詞「テ」等））

これらの指示詞系接続語について、以下のタイプＡからタイプＥに分類すると、歴史的な傾向として、指示詞として機能している段階（タイプＡ・Ｂ）から、指示詞としての機能が形式化する段階（タイプＣ・Ｄ・Ｅ）へと変化することが明らかとなった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊
○分類内容
（Ｘは先行する言語的文脈、または現場・記憶内、Ｙは言語的文脈）
タイプＡ：指示詞として機能している。Ｘ内の事態を指示対象とし、Ｙの接続表現以外の文の構成要素となる。
タイプＢ：指示詞として機能している。Ｘ内の事態を指示対象とし、Ｙにおいて接続表現として働く。
タイプＣ：指示詞としての機能は形式化している。Ｙにおいて接続表現として働く（先行する言語文脈有り）。
タイプＤ：指示詞としての機能は形式化している。Ｙにおいて接続表現として働く（先行する言語文脈無し）。
タイプＥ：指示詞としての機能は形式化している。Ｙの接続表現以外の文（もしくは文）の構成要素となる。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

さらに、上記の分析により、指示詞系接続語は、接続詞的な働きから感動詞的（フィラー）な働きへと変化するという構文的な機能の歴史的変化も明らかとなった。

次に、第二の結果について述べていく。本課題では、中古（平安時代）の接続語を総合的に調査・分析し、使用傾向を明らかとした。
方法としては、【Ⅰ】【Ⅱ】【Ⅲ】の接続語について、現在インターネットで公開されている、国立国語研究所「日本語歴史コーパス」を使用し、以下の中古における接続語の使用傾向を調査・分析した。

○調査・分析対象
【Ⅰ】「日本語歴史コーパス」において接続詞とされるもの：「また、あるいは、すなわち、ただし、そゑに、さはれ、さて」
【Ⅱ】和文に見られる漢文訓読系の接続表現：「ソモソモ」および「シカルニ・シカレドモ・シカリトテ」（「シカ」は漢文訓読特有語。ちなみに「日本語歴史コーパス」は和文のみ）。
【Ⅲ】指示詞系接続語「カカリ・サリ」系列：（指示副詞カク系列・サ系列「カク・サ」＋動詞「アリ」）「カカレバ・サレバ」等）

○中古における使用傾向
以下に、本課題によって明らかとなった、中古における接続語の使用傾向をまとめる。

【１】「日本語歴史コーパス」において接続詞とする【Ⅰ】について、作品の傾向として『枕草子・大和物語・土佐日記・和泉式部日記』が多く、『古今和歌集』は使用が少ない（全体的に見ても『古今和歌集』は接続語の使用が少ない）。
なお、全体的（【Ⅰ】【Ⅱ】【Ⅲ】）には『竹取物語・土佐日記・大和物語』は多い傾向を示す。

【２】『竹取物語』から『落窪物語』まで、そして『和泉式部日記』から『紫式部日記』で傾向が分かれる（特に【Ⅲ】の「カカリ」系から「サリ」系へ）。

【３】『源氏物語・紫式部日記』は使用傾向がよく似ている。

【４】日記である『土佐日記』と『紫式部

日記・和泉式部日記』（「マタ」の使用が多いということは共通する）は、使用傾向は似ていない。

【５】【Ⅱ】「ソモソモ」は作品別では、『古今和歌集・土佐日記・竹取物語・大和物語・源氏物語』で用いられており、『古今和歌集』（仮名序）以外は、和文においてすべて会話において使用されている。また、発話者は『土佐日記』を除きすべて男性である。

なお、他の【Ⅱ】訓読系の接続表現「シカルニ」・「シカレドモ」「シカレドモ」「シカリトテ」についても同様の傾向を示す。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 岡崎友子、指示詞系複合語について、文学論藻（東洋大学文学部紀要日本文学文化篇）、査読無、88（67）、2013、pp.168(27)-151(44)
② 竹内史郎、「Ｖヤシナイ」について―現代共通語における取り立て否定形式の文法化―、成城國文學論集、査読無、36、2013、pp.135-149
③ 岡崎友子、指示詞系接続語の歴史的変化―中古の「カクテ」「サテ」を中心に―、日本と文法の歴史と文化（くろしお出版）、査読無、2011、pp.67-87
④ 竹内史郎、近代語のアスペクト表現についての一考察―ツツアルを中心に―、日本と文法の歴史と文化（くろしお出版）、査読無、2011、pp.151-174
⑤ 岡崎友子、指示代名詞の直示用法における領域調査―高橋調査法による、2010年中四国地方のコソアー、就実論叢、査読無、40、2011、pp.29-48
⑥ 堤良一、西日本の若者のコソア―高橋調査法による岡山大学での調査から、岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要、査読無、31、2011、pp.15-26
⑦ 長谷川哲子、堤良一、アカデミックライティングにおける「分かりにくさ」の要因は何か？―意見文の分析を通じた一考察、大阪産業大学論集（人文・社会科学編）、査読無、11、2011、pp.21-34

〔学会発表〕（計７件）

① 竹内史郎、岡崎友子、接続詞の捉え方―ソレデ，ソシテ，ソレガ／ヲ，ソコデについて―、日本語学会2014年春季大会、20140518、早稲田大学
② 竹内史郎、岡崎友子、ソレデ，ソシテ，ソレガ／ヲ，ソコデについて―接続詞の捉え方、NINJAL共同研究「日本語文法の歴史的研究」研究発表会、20140309、成城大学
③ 岡崎友子、中古における指示詞系接続語―「カカリ」「サリ」を中心に―、日本語文法学会第14回大会（招待発表）、20131201、早稲田大学
④ 堤良一、ソンナＮの感情・評価的意味はどのように生じるか、日本語文法学会第14回大会、20141201、早稲田大学
⑤ 岡崎友子、中古における接続語の使用傾向について、第四回コーパス日本語学ワークショップ、20130905、国立国語研究所
⑥ 岡崎友子、指示詞を組み合わせた語に関する歴史的一考察、NINJAL共同研究「統計と機械学習による日本語史研究」研究発表会、20110902、就実大学
⑦ 岡崎友子、堤良一、指示代名詞の直示用法における領域調査―高橋調査法における、2010年度の若者のコソアー、第５回指示詞研究会・研究発表会（土曜ことばの会と共同開催）、20110122、大阪大学

〔図書〕（計３件）

① 岩田一成、くろしお出版、日本語数量詞の諸相：数量詞は数を表すコトバか、2013、256
② 金水敏、高山善行、衣畑智秀、岡崎友子、岩波書店、シリーズ日本語史３文法史、239
③ 堤良一、現代日本語指示詞の総合的研究、ココ出版、2012、241

６．研究組織

(1)研究代表者

岡崎　友子（OKAZAKI,Tomoko）
東洋大学・文学部・准教授
研究者番号：１０３７９２１６

(2)研究分担者

長谷川　哲子（HASEGAWA,Noriko）
関西学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：２０３６８１５３

松丸　真大（MATSUMARU,Michio）
滋賀大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０３７９２１８

竹内　史郎（TAKEUCHI,Shiro）
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号：７０４５５９４７

岩田　一成（IWATA,Kazunari）
広島市立大学・国際学部・准教授（移行）
研究者番号：７０５０９０６７

堤　良一（TSUTSUMI,Ryoichi）
岡山大学・社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：８０３２５０６８